

## 28) この1年間の乳房再建症例の検討

三浦 宏二・石崎 悦郎 (済生会新潟第二)  
相場 哲朗・川口 正樹 (病院外科)

1994年4月より1995年2月までに、女性乳癌症例25例中15例(60%)に subcutaneous mastectomy+広背筋弁による一期的乳房再建術を施行した。最高齢は65歳である。手術適応は 1) 大胸筋および皮膚に癌浸潤がない、2) 癌の乳頭浸潤がない、の2項目であり、2)は最終的には術中迅速病理で判断した。リンパ節郭清は兎玉法に準じて level-3 まで行った。平均手術時間は2時間15分、重篤な合併症や後遺症は認めず、患者の満足度も高かった。

同手術は局所の根治性を損なわずに高い cosmetic result が得られ、手技は非常に simple で一般外科医にも十分可能である。よって、乳房温存手術では著明な変形や癌遺残の可能性の高い stage I, II 症例にその手術適応があると考えられる。

## 29) 腹部瘻痕ヘルニアの治療経験

吉田 鐵郎・川原 薫 (医療法人誠心会)  
吉田病院外科

当院における過去20年間の腹部瘻痕ヘルニアの手術症例は11例で、女性8、男性3例、年齢は70才以上が7例であった。部位は下腹部が8例で、原疾患は虫垂炎穿孔腹膜炎4例、子宮癌3例、遊走腎2例、直腸~大腸癌2例であった。これらの症例の中7例はヘルニア門の長径が10cmを越える大きなものであった。

手術法は単純縫合閉鎖と Mayo 法、Prolene Mesh 補綴法をやっているが、手術を成功させるには

- 1) 全身状態の改善、貧血、脱水、低蛋白血症、肥満、糖尿。
- 2) 手術創の化膿防止、止血を完全に血腫を作らない。皮下に Drain を留置する。
- 3) 再発症例及び最大径 5 cm 以上の腹部瘻痕ヘルニアは tension free repair を行う。
- 4) Prolene Mesh は腹膜の外側に通常2枚縫着するが腹膜の内側に移植する時は大網膜で掩う。

## 30) 当科における palliative care の検討

川上 一岳・川合 千尋  
鈴木 聡・藤田みちよ (日本歯科大学)  
吉田 奎介 (新潟歯学部外科)

当科では進行・再発・末期癌の患者に対して palliative care の考えを念頭においた治療を行っている。過去2年間に同治療を施行した癌患者50例について検討した。

症例の内訳は大腸癌が24例と最も多く、次いで胃癌11例、乳癌・膵癌各4例等であった。主に栄養管理や疼痛対策が中心であるが、再発に対する手術、放射線照射、化学療法(静注、動注、胸腔・腹腔内投与)、温熱療法なども積極的に行った。

care の目標はできるだけ快適な状態で、少しでも長く自宅で生活できることに置いた。そのため、9回の入院を最高に、50人でのべ110回の入院を数えている。

そのための治療方針や在宅ケアについても報告する。

## 31) 腹腔内デスマイドの1例

富山 武美 (厚生連豊栄病院)  
外科  
山田 慎二 (同 内科)

デスマイド腫瘍は希な疾患でありその中でも腹腔内に発生するデスマイドは少ない。今回我々は小腸壁より発生したと思われるデスマイドを経験したので報告する。

症例は42歳男性腹部腫瘍を主訴として来院した。腹部超音波検査、CT、MRI、血管造影、小腸造影を施行し、腹腔内腫瘍の診断で平成6年9月14日開腹した。腫瘍はパウヒン弁より4cm口側の回腸壁に接して存在し、小腸壁との剝離が困難であったため、小腸部分切除を施行した。直径は1.5cmの弾性硬の腫瘍であり、術後の病理検索では腹腔内デスマイド腫瘍の診断を得た。若干の文献的考察を加えて報告する。

## 32) 特発性腹直筋血腫の1例

千田 匡・島田 寛治 (県立柿崎病院外科)

比較的稀な疾患とされている特発性腹直筋血腫の1例を経験したので若干の考察を加えて報告する。症例は56才女性、主訴は左下腹部痛。平成6年12月下旬より感冒に伴い咳嗽が出現、平成7年1月19日より咳嗽、歩行時に伴い左下腹部痛が出現、翌20日当院受診となった。左下腹部圧痛部に一致し腫瘤を触知、CTでは左腹直筋内にモザイク状腫瘤を認めた。腹直筋血腫を疑ったが疼痛の